

高校生の敬語の調査

—その意識と知識と実際—

石井直子

1. はじめに

普段、我々は様々な社会的場面に応じてことばを使っている。また、他人のことば使いに対しても、その場面との適不適を判断しているはずである。しかし、これらことば使いの有様には、当然多くの個人差がある。従来、この個人差を形成する要因として、性別、年齢、学歴などがあげられてきた。だが、これだけではあるまい。他にもいくつかの要因が関与しているだろうと思う。それが一体何であるかについては、未だ無数の仮説が立てられよう。

ここでは、その要因として、敬語規範についての知識及び敬語に対する意識を仮定した。小論は、これらとある場面でのことば使いとを調査し、その関連性を検証しようとする試みである。

ところで、「ことば使い」というのは、かなり広い概念を含みうることばであるが、小論では主に待遇表現の面のみを考察する。詳しい定義はできないが、一般的な狭義の「ことば使い」と考えてほしい。「敬語」についても、極一般的にとっておいてもらいたい。

2. 調査の概要

(1) 調査時期

1982年9月初旬。

(2) 調査対象

神奈川県立鎌倉高等学校2年生381名(男子179名、女子200名、不明2名)。

高校生を調査対象としたのは年齢、学歴などにおいて等質な属性を持ったサンプルが効率よく収集できると考えたからである。ただし、高校生は未だ敬語の習得途上にあると見られている。この特殊性は調査結果を考察する際充分注意しておかなければならない。

(3) 調査方法

アンケート調査による。クラスごとに時間をいただき、質問紙を配布し、調査者が簡単な説明・注意をした上で回答を記入してもらった。(なお、1クラスは定員45名)

(4) 調査項目

調査項目は、フェイスシート項目の他、次の4つに

大別される。

(i) 敬語についての規範を問うもの——項目A

全部で5項目ある。そのうち2項目では「敬語」ではなく「ことば使い」ということばを使い、それに対する関心を問うた。選択肢によって回答を求めた。

(ii) 敬語に対するイメージを問うもの——項目D

SD法を用いた。これは、大雑把にいわれ、対象(ここでは「敬語」)の持つイメージが、反対の意味を持つことばの対のどちらにより近いかを調べ、分析する方法である。本調査では、ことばの対を12対設定し、各々の間を5段階に分けた。

(iii) 敬語規範についての知識を問うもの——項目C

ここには、4種類の傾向の異なる設問に各3問を置いた。

(iv) ことば使いの実態を問うもの——項目B

ここでは、まずインフォーマントにとって上下関係、親疎関係の異なる3人の聞き手を設定した。すなわち、〔土目上、+親〕である「同じ年ごろの親しい友人」、〔土目上、-親〕である「同じ年ごろのよく知らない人」、〔+目上、±親〕である「尊敬する目上の人」である。これらの人に対して、ある事柄をどう言うかを調べた。

以上の(i)から(iv)で問うものを、順に「意見」「イメージ」「知識」「実態」とよぶことにする。

3. 結果

3.1. 「意見」

「意見」の5項目の質問文及び選択肢とその回答の内訳を表3.1.1から表3.1.5に示す。全体として、ことば使いに関心があり、敬語に対して肯定的な意見を持つ者が多いという傾向があるようである。この傾向は男子よりも女子のほうに強いらしい。A. a., A. b., A. e. は性別と有意に関連している。^(註1)

また、この5項目を林の数量化理論第三類にかけたところ、第1軸、第2軸について図3.1.1に示すような結果となった。寄与率は第1軸が16.0%、第2軸が13.6%である。

表3.1.1

A. a. あなたは他人と話す時自分のことば使いを気にするほうですか。

人数 期待値	横% 縦% 全体%		男		女		計
1. 非常に気にする	3	12.0	22	88.0	25		
				1.7		11.1	
	11.8	0.8	13.2	5.9		6.6	
2. どちらかという気にする	96	46.8	109	53.2	205		
				53.9		55.1	
	97.0	25.5	108.0	29.0		54.5	
3. どちらかという気にしない	55	50.0	55	50.0	110		
				30.9		27.8	
	52.1	14.6	57.9	14.6		29.3	
4. ほとんど気にしない	24	66.7	12	33.3	36		
				13.5		6.1	
	17.0	6.4	19.0	3.2		9.6	
計	178		198		376		
		47.3		52.7		100.0	

$\chi^2 = 18.252$ (自由度 = 3)
危険率 = 0.04%

表3.1.2

A. b. あなたは他人と話す時相手のことば使いが気になるほうですか。

人数 期待値	横% 縦% 全体%		男		女		計
1. 非常に気になる	8	38.1	13	61.9	21		
				4.5		6.6	
	9.9	2.1	11.1	3.5		5.6	
2. どちらかという気になる	84	47.7	92	52.3	176		
				47.2		46.5	
	83.3	22.3	92.7	24.5		46.8	
3. どちらかという気にならない	48	40.3	71	59.7	119		
				27.0		35.9	
	56.3	12.8	62.7	18.9		31.6	
4. ほとんど気にならない	38	63.3	22	36.7	60		
				21.3		11.1	
	28.4	10.1	31.6	5.9		16.0	
計	178		198		376		
		47.3		52.7		100.0	

$\chi^2 = 9.228$ (自由度 = 3)
危険率 = 2.64%

表3.1.3

A. c. あなたは話し相手や場面によって敬語を使いかけることは必要だと思いますか。

人数 期待値	横% 縦% 全体%		男		女		計
1. 思う	168	46.3	195	53.7	363		
				94.9		98.5	
	171.3	44.8	191.7	52.0		96.8	
2. 思わない	9	75.0	3	25.0	12		
				5.1		1.5	
	5.7	2.4	6.3	0.8		3.2	
計	177		198		375		
		47.2		52.8		100.0	

$\chi^2 = 2.778$ (自由度 = 1)
危険率 = 9.56%

表3.1.4

A. d. あなたは話し相手や場面によって敬語をうまく使えられますか。

人数 期待値	横% 縦% 全体%		男		女		計
1. うまく使えられる	8	44.4	10	55.6	18		
				4.6		5.1	
	8.4	2.2	9.6	2.7		4.9	
2. 使えられるほう	120	47.6	132	52.4	252		
				69.0		67.0	
	118.2	32.3	133.8	35.6		67.9	
3. 使えられないほう	42	44.7	52	55.3	94		
				24.1		26.4	
	44.1	11.3	49.9	14.0		25.3	
4. ほとんど使えられない	4	57.1	3	42.9	7		
				2.3		1.5	
	3.3	1.1	3.7	0.8		1.9	
計	174		197		371		
		46.9		53.1		100.0	

$\chi^2 = 0.577$ (自由度 = 3)
危険率 = 90.18%

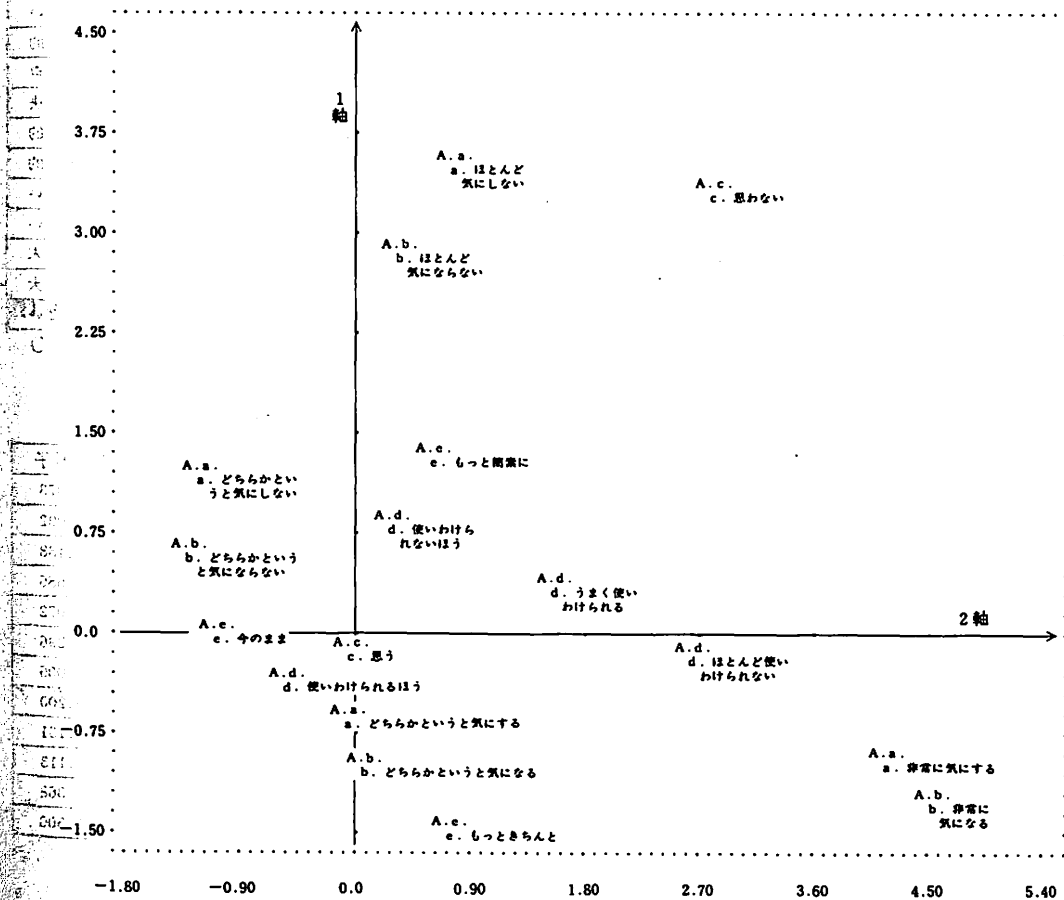
表3.1.5

A. e. あなたは将来日本の歌語はどうなるのがよいと思いますか。

人数 期待値	横% 縦% 全体%	男	女	計
1. もっときちんとしたほうがよい	25 30.1 14.4 39.1 6.8	58 69.9 29.7	83	22.5
2. 今のままがよい	80 45.7 46.0 82.5 21.7	95 54.3 48.7	175	47.4
3. もっと簡素になったほうがよい	69 62.2 39.7 52.3 18.7	42 37.8 21.5	111	30.1
計	174 47.2	195 52.8	369	100.0

$\chi^2 = 19.843$ (自由度 = 2)
危険率 = 0.01%

図3.1.1



この結果から次の3点が読みとれると思う。

(i)第1軸では、ことば使いへの無関心・敬語に対する否定的意見が高い値をとる。その逆の敬語に対する肯定的な意見などは負の値をとる。

(ii)第2軸では、肯定的か否定的かにかかわらず、はっきりした意見が高い値をとる、中間的な意見は低い値をとる。

(iii)A. d.すなわち敬語の使いわけ能力の自己評価項目の各カテゴリは、他項目とは傾向の異なる分布を示す。その異なる点は次のようにまとめられる。

①A. d.のカテゴリは第2軸の値によってははっきり分離されるが、第1軸ではどれも0に

近い、狭い範囲に集っている。

②しかも、第1軸においては、「使いわけられないほう」「うまく使いわけられる」が正の値をとり、「ほとんど使いわけられない」「使いわけられるほう」が負の値をとる。これは、先に(i)で示した第1軸の解釈にあわない。

以上の(i)と(ii)は宮本1982の結果とよく一致すると思う。(iii)は敬語の使いわけ能力の自己評価には第1軸、第2軸以外の要因が働いているということであろう。その要因が何かは第3軸以降の分析でもはっきりしなかった。

3.2. 「イメージ」

表3.2.1

D. あなたの「敬語」に対する感じは、各々のことばの対のどの段階に最もよくあてはまりますか。

(人(%))

	非常に	やや	どちらでもない	やや	非常に	
良い	49 (12.9)	184 (48.3)	125 (32.8)	16 (4.2)	3 (0.8)	悪い
あかぬけた	15 (3.9)	48 (12.6)	207 (54.3)	82 (21.5)	24 (6.3)	やばったい
形式的	129 (33.9)	162 (42.5)	43 (11.3)	37 (9.7)	5 (1.3)	実質的
大声	3 (0.8)	17 (4.5)	221 (58.0)	121 (31.8)	15 (3.9)	小声
快い	37 (9.7)	113 (29.7)	171 (44.9)	43 (11.3)	11 (2.9)	不快
動的	1 (0.3)	11 (2.9)	102 (26.8)	182 (47.8)	80 (21.0)	静的
理想的	40 (10.5)	122 (32.0)	147 (38.6)	50 (13.1)	17 (4.5)	現実的
遠い	51 (13.4)	149 (39.1)	134 (35.2)	37 (9.7)	6 (1.6)	近い
好き	9 (2.4)	63 (16.5)	201 (52.8)	74 (19.4)	29 (7.6)	嫌い
重要	87 (22.8)	185 (48.6)	75 (19.7)	19 (5.0)	11 (2.9)	些末
厳格	79 (20.7)	153 (40.2)	122 (32.0)	19 (5.0)	3 (0.8)	寛大
本当らしい	8 (2.1)	36 (9.4)	172 (45.1)	107 (28.1)	51 (13.4)	うそっぽい

「イメージ」を調べるのに用いたことばの対とそれらの間の各段階への回答者数を表3.2.1に示す。この表から、敬語に対して「形式的(↔実質的)」「重要(↔些末)」「静的(↔動的)」などのイメージが強いらしいことがわかる。

さて、これを因子分析した結果の因子負荷量を第3因子まで示したのが表3.2.2である。これに基いて、敬語イメージの因子を次のように解釈してみた。

第1因子：敬語に対する好意的なイメージ

第2因子：敬語が、形式として厳格に保たれているというイメージ

第3因子：敬語は社会生活上の方便として有用であるというイメージ

表3.2.2. 単語の因子負荷量

	第1因子	第2因子	第3因子
悪い	-0.678	-0.407	-0.073
やばったい	-0.634	-0.096	0.092
実質的	0.456	-0.423	0.438
小声	-0.350	0.378	0.686
不快	-0.715	-0.290	-0.072
静的	-0.336	0.620	0.296
現実的	0.010	-0.535	0.006
近い	0.539	-0.339	0.200
嫌い	-0.789	-0.156	-0.131
些末	-0.572	-0.406	0.113
寛大	0.353	-0.536	0.368
うそっぽい	-0.599	-0.018	0.300

ところで、以上の各因子のうちどれをより強く持っているか、どの因子が弱いかに、よって、インフォーマントを分類することができる。因子得点を利用すればよい。第3因子までの因子得点の正負を組み合わせで8個のグループを作り、そのどれに属するかでインフォーマントを分類する。これをイメージグループとよぶことにしよう。

分類した結果を表3.2.3に示す。各グループ名は左から順に第1、第2、第3因子の正負を表している。

この分類は性別との関連が見られる。男子に「(-)(-) (+)」「(-)(+)(-)」が多く、女子に「(+)(+)(-)」「(+)(+)(+)」が多いようである。女子のほうが男子より敬語に対して好意的なイメージを多く持っているらしい。

3.3. 「知識」

「知識」に関する項目の質問文及び回答の内訳を次に示す。C. a. は大倉1967など、C. b. は野元1977を参考にして作成したものである。

表3.3.1 ~ 表3.3.3 (別紙)

表3.2.3

度数 期待値	横% 縦% 全体%	男		女		計	
イ		33	62.3	20	37.7	53	14.5
	(-)(-)(-)	25.1	9.0	27.9	5.5		
メ		16	47.1	18	52.9	34	9.3
	(-)(-)(+)	16.1	4.4	17.9	4.9		
リ		30	60.0	20	40.0	50	13.7
	(-)(+)(-)	23.6	8.2	26.4	5.5		
ジ		21	47.7	23	52.3	44	12.0
	(-)(+)(+)	20.8	5.7	23.2	6.3		
ケ		24	47.1	27	52.9	51	13.9
	(+)(-)(-)	24.1	6.6	26.9	7.4		
ル		19	46.3	22	53.7	41	11.2
	(+)(-)(+)	19.4	5.2	21.6	6.0		
リ		17	32.7	35	67.3	52	14.2
	(+)(+)(-)	24.6	4.6	27.4	9.6		
ブ		13	31.7	28	68.3	41	11.2
	(+)(+)(+)	19.4	3.6	21.6	7.7		
計		173	47.3	193	52.7	366	100.0

$\chi^2 = 16.468$ (自由度 = 7) 危険率 = 2.12%

表3.3.2

C. b. 次の短文で (1)話し手 (2)聞き手 (3)話題になっている人物の地位の上下はどうなっているでしょうか。

(1) あの方は今日いらっしゃるよ。

上→下	(3)-(1)-(2)	(3)-(2)-(1)	その他	無回答
	人数	306	61	10
%	80.3	16.0	2.6	1.0

(2) 課長はまだ私のところへ報告してまいりません。

上→下	(2)-(1)-(3)	(2)-(3)-(1)	(3)-(2)-(1)	その他	無回答
	人数	179	119	49	28
%	47.0	31.2	12.9	7.3	1.6

(3) あいつがお前に命じたんだって？

上→下	(1)-(3)-(2)	(1)-(2)-(3)	その他	無回答
人数	168	189	19	5
%	44.1	49.6	5.0	1.3

表3.3.1

C. a. 次の文の { } の中の言い方はどれが正しいと思いますか。

(1)車掌が乗客に：

他のお客様が { 1.ご迷惑いたします
2.ご迷惑されます
3.迷惑します
4.ご迷惑なさいます } ので、もう少々お静かに願います。

	1	2	3	4	その他 無回答	計
人数	61	106	29	182	3	381
%	16.0	27.8	7.6	47.8	0.8	100.0

(2)学生が先生に：

先生はいつ北海道へ { 1.行った
2.まいった
3.いらっしゃった
4.まいられた } のですか。

	1	2	3	4	その他 無回答	計
人数	20	1	322	38	0	381
%	5.2	0.3	84.5	10.0	0.0	100.0

(3)説明会で：

{ 1.お聞きになりたい
2.お聞きしたい
3.聞きたい } ことがありましたら、どうぞ遠慮なくおっしゃって下さい。

	1	2	3	その他 無回答	計
人数	276	65	40	0	381
%	72.4	17.1	10.5	0.0	100.0

表3.3.3

C.c. 次の文で敬語を正しく使っていると思われるものは○、誤りがあると思われるものは×を()に記入して下さい。また、×をつけたものについては、その理由を下から選んで□に記号を書いて下さい。

- A. 謙讓語を使うべきところに尊敬語を使っている。
- B. 謙讓語を使うべきところに丁寧語を使っている。
- C. 尊敬語を使うべきところに謙讓語を使っている。
- D. 尊敬語を使うべきところに丁寧語を使っている。
- E. 丁寧語を使うべきところに謙讓語を使っている。
- F. 丁寧語を使うべきところに尊敬語を使っている。
- G. 敬語が必要なのに使っていない。
- H. 敬語は不要なのに使っている。

(1) 新入社員が社長に：「課長がそうおっしゃいました。」

×	○	無回答
150 (39.4)	222 (58.3)	9 (2.4)

A	F	C	D	G	その他	無回答	計
64	21	12	12	9	16	16	150
16.8	5.5	3.1	3.1	2.4	4.2	4.2	39.4
42.7	14.0	8.0	8.0	6.0	10.7	10.7	100.0

(2) 受付係が来客に：「そういうご用件でしたら、この先の広報室でうかがって下さい。」

×	○	無回答
242 (63.5)	132 (34.6)	7 (1.8)

C	E	F	D	B	H	G	A	無回答	計
69	62	22	17	16	15	14	8	19	242
18.1	16.3	5.8	4.5	4.2	3.9	3.7	2.1	5.0	63.5
28.4	25.5	9.1	7.0	6.6	6.2	5.8	3.3	7.9	100.0

(3) テレビで司会者がゲストに：「畑さんのお宅には何種類くらいの動物がいらっしゃるのですか。」

×	○	無回答
276 (72.5)	98 (25.7)	7 (1.8)

H	F	その他	無回答	計
203	44	19	10	276
53.3	11.5	5.0	2.6	72.5
73.6	15.9	6.9	3.6	100.0

C. a.を見ると、(2)(3)は正答率が高いか(1)は低い。これは、誤用とされる「ご迷惑されます」という言い方が広く普及していることを表すと考えられる。

C. b.では、野元1977や国立国語研究所1982と概ね似たような傾向が見られる。(3)の正答率が特に低いのは、「聞き手」と「話題になっている人物」とを同位と判断する者がかなりいたためであろうと思う。

C. c.は予想外に正答率が低かったが、(3)の敬語の過剰を指摘すべき間では比較的正答率が高かった。

以上の結果をもとに、インフォーマントを分類して

みよう。「知識」の項目には全部で12の間がある。それぞれについて、正答したら1、それ以外に0を与えると、各インフォーマントの「知識」の量は0以上12以下の数値で表せる。これを知識点とよぶ。そして、その大小によってインフォーマントを分類したものを知識グループとよぶ。

分類の結果及び知識点の平均と標準偏差(S. D.)を表3.3.4に示す。知識グループは性別と有意に関連している。男子よりも女子のほうが「知識」が多いようである。

表3.3.4

知識グループ	度数 期待値	横% 縦%		男		女		計	
		縦%	全体%						
知 識 グ ル ー プ	低	64	53.8	55	46.2	119	31.4	27.5	
		56.2	16.9	62.8	14.5				
	中	71	50.4	70	49.6	141	37.2	35.0	
		66.6	18.7	74.4	18.5				
高	44	3	75	63.0	119	31.4	37.5		
	56.2	11.6	62.8	19.8					
計	179	47.2	200	52.8	379	100.0			
平均(S. D.)		5.291 (1.756)		5.775 (1.855)		5.551 (1.823)			

$$\chi^2 = 7.623 \quad (\text{自由度} = 2) \quad \text{危険率} = 2.21\%$$

3.4. 「実態」

2章で述べたように、これは聞き手に応じて同じ事柄をどのように言いわけかの調査である。事柄としては次の3つを設定した。

- (i) 「どこそこへ行く道を知っているか」と尋ねる時の「知っているか」——B. a.
- (ii) 「どこそこへ行く道を教えてくれ」と頼む時の「教えてくれ」——B. b.
- (iii) 「校長先生は出張中で、今日はいない」と言うときの「いない」——B. c.

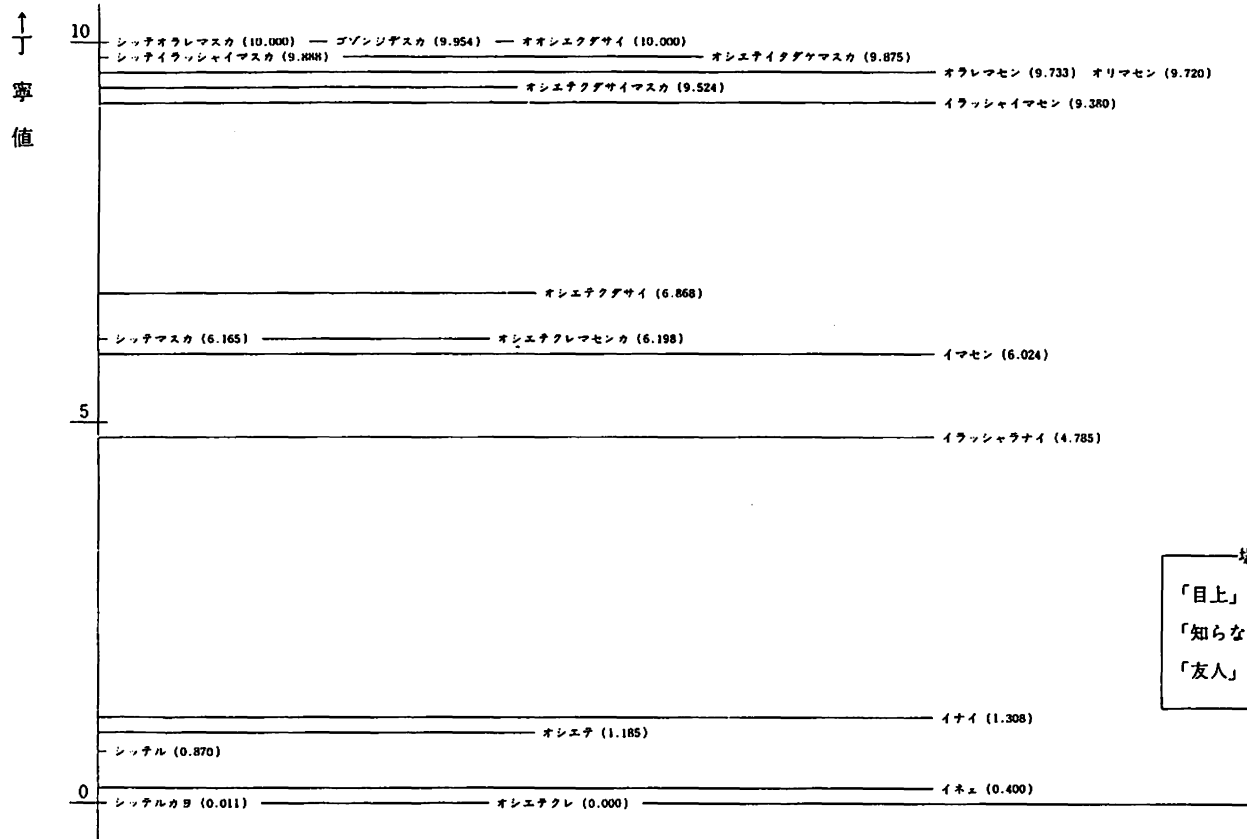
なお、聞き手である「同じ年ごろの親しい友人」「同じ年ごろのよく知らない人」「尊敬する目上の人」のことを、以下「友人」「知らない人」「目上」と略記する。

分析には荻野綱男氏による丁寧さの数量化の方法を利用する。この方法は、いくつかの場面における種々の語形の出現頻度をもとに、各語形と場面の丁寧さを同時に数値で表すものである。詳細は柴田1980などを参照されたい。なお、小論では、この荻野氏による方法を荻野法とよび、それによって求めた数値を丁寧値とよぶことにする。

以下、分析の結果について述べる。各問ごとに、回答された語形は6~7個の語類に分けておく。表3.4.1から表3.4.3は、その語類の各聞き手に対する使用頻度及びそれに基づく丁寧値を示すものである。また、図3.4.1は3問あわせて丁寧値を求めた結果である。丁寧値はどれも最小0、最大10に固定した。

図3.4.1

B項目全ての数量化



場面の丁寧値	
「目上」	10.000
「知らない人」	4.295
「友人」	0.000

まず、図3.4.1 から読みとれることは次のとおりである。

(i) 総計20個の語類は丁寧さにおいて次のように大きく三分される。

- ① 敬語形式のつかない、ぞんざいなもの
- ② デスマス形を主とした、中位の丁寧さのもの

- ③ 尊敬語や謙譲語を含む、丁寧なもの
 - (ii) 中位の丁寧さのグループの中で、「イラッシャライ」類はやや離れて、低い位置にある。
 - (iii) 「知らない人」は「目上」と「友人」の間よりやや低く待遇されている。
- 次に、各問ごとに見ていこう。

表3.4.1

B.a. 「知っているか」の数量化

度 数	横%		シッテル		シッテマスカ		シッテイラッ		ゴゾンジデ		シッテオラレ		計	丁寧値	
	度	縦%	カ	ヨ	類	類	類	類	ス	カ	類	類			
「友人」	13	3.4 92.8	370	96.4 74.0	1	0.3 0.3	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	384	33.5	0.000
「知らない人」	1	0.3 7.1	128	33.3 25.6	252	65.6 64.8	2	0.5 1.9	1	0.3 0.8	0	0.0 0.0	384	33.5	4.827
「目上」	0	0.0 0.0	2	0.5 0.4	136	36.0 35.0	103	27.2 98.1	126	33.3 99.2	11	2.9 100.0	378	33.0	10.000
計	14	1.2	500	43.6	389	33.9	105	9.2	127	11.1	11	1.0	1146	100.0	
丁寧値		0.000		0.964		6.502		9.897		9.958		10.000			

B.a. では、「シッテオラレマスカ」類の丁寧値が最も高いという点でやや内省と食い違う。しかし、これはその使用頻度が11と少いことの影響であろうと思う。

その他は、一般的傾向に付け加えることはなさそうである。

表3.4.2

B.b. 「教えてくれ」の数量化

度 数	横%		オシエテ		オシエテレ		オシエテ		オシエテ		オオシエ		計	丁寧値	
	度	縦%	レ	類	マ	セ	サイ	類	ダ	ケ	サイ	類			
「友人」	54	13.9 93.1	335	86.1 66.9	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	389	33.6	0.000
「知らない人」	4	1.0 6.9	164	42.3 32.7	97	25.0 64.7	114	29.4 53.3	6	1.5 8.1	3	0.8 2.1	388	33.5	4.426
「目上」	0	0.0 0.0	2	0.5 0.4	53	13.5 35.3	100	26.3 46.7	68	17.9 91.9	138	36.3 97.9	380	32.8	10.000
計	58	5.0	501	43.3	150	13.0	214	18.5	74	6.4	141	12.2	1157	100.0	
丁寧値		0.000		1.221		6.282		6.938		9.534		9.877			

B. b.の特徴は、「オシエテクダサイ」類が「知らない人」と「目上」とに同じ位の割合で使われている点

である。このため、「オシエテクダサイ」類は、先に見た中位の丁寧さの語類の中でも目立って丁寧値が高い。

表3.4.4

B. c. 「(校長先生は) いない」の数量化

横% 縦%	イネエ類		イナイ類		イラッシャラ ナイ類		イマセン類		イラッシャイ マセン類		オリマセン 類		オラレマセン 類		計	丁寧値		
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%				
「友人」	40	10.4 87.0	301	78.6 65.0	40	10.4 30.3	1	0.3 0.5	1	0.3 0.4	0	0.0 0.0	0	0.0 0.0	383	33.5	0.000	
「知らない人」	5	1.3 10.9	157	41.5 33.9	47	12.4 35.6	143	37.8 66.8	24	6.3 9.8	1	0.3 4.8	1	0.3 4.5	378	33.1	3.597	
「目上」	1	0.3 2.2	5	1.3 1.1	45	11.8 34.1	70	18.4 32.7	219	57.5 89.8	20	5.2 95.2	21	5.5 95.5	381	33.4	10.000	
計	46	4.0	463	40.5	132	11.6	214	18.7	244	21.4	21	1.8	22	1.9	1142	100.0		
丁寧値		0.000		0.791		4.485		5.568		9.582		9.985		10.000				

B. c. は前の2問とは違って、話題中の人物への待遇表現にも注目される。まず、その話題中の人物への敬語の有無によって対になる語類を挙げ、各々の丁寧さを比べてみよう。対になるのは、「イナイ」類と「イラッシャラナイ」類、「イマセン」類と「イラッシャイマセン」類である。前者では3.694、後者では4.014だけ素材敬語の有るほうが丁寧値が高い。話題中の人物に敬語を用いることによって、格段に丁寧になるということである。

これによって、「目上」に向けて話す時には話題中の人物にも敬語を使うが、「友人」に話す時にはあまり使わない、という点も説明できよう。

また、このB. c.の中で特徴的なのは「イラッシャラナイ」類であろう。この語類は3人の聞き手に対してほとんど同じ割合で使われている。つまり、「目上」に対して丁寧語を使わず、話題中の人物への敬語だけを使っている者が全体の1割を超えているのである。これは明らかに誤用で、やがて敬語習得が進めば正されるではあろう。しかし、敬語の丁寧語化という動きを考える上ではおもしろい数字である。

以上で項目Bに現れた各語類の丁寧値が求められた。次にこれを利用してインフォーマントのことは使いの様子を考えてみたい。そのために、ことは使い全体の丁寧さと聞き手に応じた敬語の使いわけ能力とについ

て指標を設けた。

まず、ことは使いの丁寧さは各インフォーマントが回答した9個の語形の丁寧値の平均によって表すこととする。これを丁寧さ点とよび、その大小によってインフォーマントを分類したものを丁寧さグループとよぶ。

表3.4.4

度数 期待値	横% 縦% 全体%	男		女		計	
		度数	%	度数	%	度数	%
丁寧さ グループ	低	88	71.0	36	29.0	124	34.3
		58.2	24.3	65.8	9.9		
グループ	中	53	48.2	57	51.8	110	30.4
		51.7	14.6	58.3	15.7		
グループ	高	29	22.7	99	77.3	128	35.4
		60.1	8.0	67.9	27.3		
計		170	47.0	192	53.0	362	100.0
平均 (S. D.)		4.014 (1.148)		5.038 (0.960)		4.556 (1.166)	

$$\chi^2 = 59.114 \text{ (自由度} = 2 \text{)} \quad \text{危険率} = 0.00\%$$

丁寧さグループは性別と有意に関連する。女子のほうが男子より、ことば使いの丁寧な者が多いといえる。

次に、聞き手に応じて敬語を使いわける能力について考える。ことば使い全体が丁寧でなくても、ぞんざいなほうがよい場面ではよりぞんざいなことば、丁寧さを求められる場面ではより丁寧なことばを使っているのであれば、敬語の使いわけ能力が高いと認めることができよう。そこで、各インフォーマントの敬語の使いわけ能力を次のような指標で表すこととした。

各問ごとに、「目上」に対して用いられた語形と「友人」に用いられた語形の丁寧値の差を求め、それを平均する。その値が大きいほどよく敬語を使いわけているとしよう。これを使いわけ点とよび、その大小によるインフォーマントの分類を使いわけグループとよぶ。

使いわけグループは性別と有意に関連している。表3.4.5で見ると、女子のほうが男子より使いわけ点が高い。つまり、場面に応じてよく敬語を使いわける者が多いということである。これは国立国語研究所1957などの調査結果と相反するものであった。

表3.4.5

度数 期待値	横% 縦% 全体%	男		女		計	
		度数	横%	度数	横%	度数	横%
使 い	低	82	68.3	38	31.7	120	32.9
		56.2	22.5	63.8	19.6		
わ け グ ル ー プ	中	45	38.5	72	61.5	117	32.1
		54.8	12.3	62.2	19.7		
高	高	44	34.4	84	65.6	128	35.1
		60.0	12.1	68.0	23.0		
計	計	171	46.8	194	53.2	365	100.0
平均 (S.D.)		6.960 (1.552)		7.732 (1.243)		7.374 (1.446)	

$\chi^2 = 33.548$ (自由度 = 2) 危険率 = 0.00%

3.5. 「実態」と「意見」「イメージ」「知識」

本節では、始めに提起したように、ことば使いと「意見」「イメージ」「知識」の関連性を調べよう。そのためには、前節で示した「実態」の2指標と各節ごとに示したグループを用いる。また、これまで見てきた

ところでは、ほとんどの場合、性別が結果に関連していた。この影響を除くため、男女別に分析することとする。以下に掲げるのは、紙幅の関係上、女子の表のみとする。

まず、丁寧さグループから見ていこうと思う。

表3.5.1 A. a. (自分のことば使い) と丁寧さグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. 非常に気にする		2. どちらかという気にする		3. どちらかという気にしない		4. ほとんど気にしない		計	
		度数	横%	度数	横%	度数	横%	度数	横%		
丁 寧 さ グ ル ー プ	低	3	8.3	15	41.7	12	33.3	6	16.7	36	
		4.0	14.3	19.9	14.3	10.0	22.6	54.5	3.2		
中	中	5	8.8	36	63.2	15	26.3	1	1.8	57	
		6.3	23.8	31.5	34.3	15.9	28.3	9.1	0.5		
高	高	13	13.4	54	55.7	26	26.8	4	4.1	97	
		10.7	61.9	53.6	51.4	27.1	49.1	36.4	2.1		
計	計	21	11.1	105	55.3	53	27.9	11	5.8	190	100.0

$\chi^2 = 12.742$ (自由度 = 6) 危険率 = 4.73%

表3.5.2 A. b. (相手のことば使い) と丁寧さグループ

人数 期待値		積% 縦% 全体%		1. 非常に気になる		2. どちらかという気 になる		3. どちらかという気 にならない		4. ほとんど気になら ない		計	
丁寧 さ グ ル ー プ	低	4	11.1	9	25.0	14	38.9	9	25.0	36		18.9	
		2.5	2.1	16.3	4.7	13.1	7.4	4.2	4.7				
	中	2	3.5	30	52.6	21	36.8	4	7.0	57		30.0	
3.9	1.1	25.8	15.8	20.7	11.1	6.6	2.1						
高	7	7.2	47	48.5	34	35.1	9	9.3	97		51.1		
6.6	3.7	43.9	24.7	35.2	17.9	11.2	4.7						
計		13	6.8	86	45.3	69	36.3	22	11.6	190		100.0	

$\chi^2 = 13.252$ (自由度 = 6) 危険率 = 3.92%

表3.5.3 A. c. (敬語の必要性) と丁寧さグループ

人数 期待値		積% 縦% 全体%		1. 必要だと思う		2. 必要だと思わ ない		計	
丁寧 さ グ ル ー プ	低	35	97.2	1	2.8	36		18.9	
		35.4	18.4	0.6	0.5				
	中	56	98.2	1	1.8	57		30.0	
56.1	29.5	0.9	0.5						
高	96	99.0	1	1.0	97		51.1		
95.5	50.5	1.5	0.5						
計		187	98.4	3	1.6	190		100.0	

$\chi^2 = 0.532$ (自由度 = 2) 危険率 = 76.66%

表3.5.4 A. d. (使いわけ自己評価) と丁寧さグループ

人数 期待値		積% 縦% 全体%		うまく使いわけられ る		使いわけられるほう		使いわけられないほう		ほとんど使いわけら れない		計	
丁寧 さ グ ル ー プ	低	0	0.0	23	63.9	13	36.1	0	0.0	36		19.0	
		1.7	0.0	24.2	12.2	9.7	6.9	0.4	0.0				
	中	1	1.8	38	66.7	18	31.6	0	0.0	57		30.2	
2.7	0.5	38.3	20.1	15.4	9.5	0.6	0.0						
高	8	8.3	66	68.8	20	20.8	2	2.1	96		50.8		
4.6	4.2	64.5	34.9	25.9	10.6	1.0	1.1						
計		9	4.8	127	67.2	51	27.0	2	1.1	189		100.0	

$\chi^2 = 10.305$ (自由度 = 6) 危険率 = 11.24%

表3.5.5 A.e. (敬語の将来) と丁寧さグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. もっときちんとした ほうがよい		2. 今のままがよい		3. もっと簡素になった ほうがよい		計
丁寧さ グループ	低	5	14.3	16	45.7	14	40.0	35
			9.6		17.0		34.1	
		9.7	2.7	17.6	8.6	7.7	7.5	
中	16	28.6	29	51.8	11	19.0	56	
		30.8		30.9		26.8		
	15.6	8.6	28.1	15.5	12.3	5.9		29.9
高	31	32.3	49	51.0	16	16.7	96	
		59.6		52.1		39.0		
	26.7	16.6	48.3	26.2	21.0	8.6		51.3
計		27.8		50.3		21.9	187	100.0

$\chi^2 = 9.784$ (自由度 = 4) 危険率 = 4.49%

「意見」の各項目の中では表3.5.1のA.a.と表3.5.2のA.b.とが丁寧さグループと有意に関連する。自分や相手のことば使いに対する関心の強い者のほうが実際のことば使いが丁寧であるらしい。また、表3.5.5のようにA.e.もことば使いの丁寧さと関連が

あるようである。ただし、男子ではA.e.との関連は特に見られない。

イメージグループと丁寧さグループとの関連も女子でのみ見られるものである。しかし、どう関連しているのかは、表3.5.6からははっきりわからない。

表3.5.6 イメージグループと丁寧さグループ

度数 期待値	横% 縦% 全体%	イ メ ー ジ グ ル ー プ										計						
		(-) (-) (-)	(-) (-) (+)	(-) (+) (-)	(-) (+) (+)	(+) (-) (-)	(+) (-) (+)	(+) (+) (-)	(+) (+) (+)									
丁寧さ グループ	低	5	15.2	1	3.0	5	15.2	7	21.2	1	3.0	5	15.2	7	21.2	2	6.1	33
			27.8		5.6		25.0		31.8		4.0		23.8		20.6		7.4	
		3.2	2.7	3.2	0.5	3.6	2.7	3.9	3.8	4.5	0.5	3.7	2.7	6.1	3.8	4.8	1.1	
中	7	12.3	6	10.5	8	14.0	6	10.5	8	14.0	10	17.5	6	10.5	6	10.5	57	
		38.9		33.3		40.0		27.3		32.0		47.6		17.6		22.2		
	5.5	3.8	5.5	3.2	6.2	4.3	6.8	3.2	7.7	4.3	6.5	5.4	10.5	3.2	8.3	3.2		30.8
高	6	6.3	11	11.6	7	7.4	9	9.5	16	16.8	6	6.3	21	22.1	19	20.0	95	
		33.3		61.1		35.0		40.9		64.0		28.6		61.8		70.4		
	9.2	3.2	9.2	5.9	10.3	3.8	11.3	4.9	12.8	8.6	10.8	3.2	17.5	11.4	13.9	10.3		51.4
計		9.7		9.7		10.8		11.9		13.5		11.4		18.4		14.6	185	100.0

$\chi^2 = 24.452$ (自由度 = 14) 危険率 = 4.04%

知識グループと丁寧さグループの関連を調べると、 χ^2 検定では危険率10.92%で有意とはいえない。しかし、表を見ると、知識点の低いグループは丁寧さ点も低く、高いグループは高い、という傾向がかなりはっきり読みとれる。これは両グループの中間層で期待値

と実際の人数とがかなり一致しているためと思われる。グルーピングの際の欠陥である。

表3.5.7 知識グループと丁寧さグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	知 識 グ ル ー プ						計
		低		中		高		
丁寧 さ グ ル ー プ	低	15	41.7	12	33.3	9	25.0	36
			28.8		17.9		12.3	
	9.8	7.8	12.6	6.3	13.7	4.7	18.8	
中	17	29.8	20	35.1	20	35.1	57	
		32.7		29.9		27.4		
15.4	8.9	19.9	10.4	21.7	10.4	29.7		
高	20	20.2	35	35.4	44	44.4	99	
		38.5		52.2		60.3		
26.8	10.4	34.5	18.2	37.6	22.9	51.6		
計		52		67		73	192	
			27.1		34.9		38.0	100.0

$\chi^2 = 7.556$ (自由度 = 4) 危険率 = 10.92%

表3.5.8 A. a. (自分のことば) と使いわけグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. 非常に気にする								計
		2. どちらかという気にする		3. どちらかという気にしない		4. ほとんど気にしない				
使 い わ け グ ル ー プ	低	2	5.3	23	60.5	10	26.3	3	7.9	38
			9.5		21.5		18.9		27.3	
	4.2	1.0	21.2	12.0	10.5	5.2	2.2	1.6	19.8	
中	8	11.1	34	47.2	25	34.7	5	6.9	72	
		38.1		31.8		47.2		45.5		
7.9	4.2	40.1	17.7	19.9	13.0	4.1	2.6	37.5		
高	11	13.4	50	61.0	18	22.0	3	3.7	82	
		52.4		46.7		34.0		27.3		
9.0	5.7	45.7	26.0	22.6	9.4	4.7	1.6	42.7		
計		21		107		53		11	192	
			10.9		55.7		27.6		5.7	100.0

$\chi^2 = 6.482$ (自由度 = 6) 危険率 = 37.15%

表3.5.9 A. b. (相手のことば) と使いわけグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. 非常に気になる								計
		2. どちらかという気になる		3. どちらかという気にならない		4. ほとんど気にならない				
使 い わ け グ ル ー プ	低	1	2.6	16	42.1	16	42.1	5	13.2	38
			7.7		18.2		23.2		22.7	
	2.6	0.5	17.4	8.3	13.7	8.3	4.4	2.6	19.8	
中	5	6.9	30	41.7	28	38.9	9	12.5	72	
		38.5		34.1		40.6		40.9		
4.9	2.6	33.0	15.6	25.9	14.6	8.3	4.7	37.5		
高	7	8.5	42	51.2	25	30.5	8	9.8	82	
		53.8		47.7		36.2		36.4		
5.6	3.6	37.6	21.9	29.5	13.0	9.4	4.2	42.7		
計		13		88		69		22	192	
			6.8		45.8		35.9		11.5	100.0

$\chi^2 = 3.875$ (自由度 = 6) 危険率 = 69.36%

表3.5.10 A. c. (敬語の必要性)と使いわけグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. 必要だと思う		2. 必要だと思わない		計
使 い わ け グ ル ー プ	低	37	97.4	1	2.6	38
		37.4	19.6 19.3	0.6	33.3 0.5	19.8
中	71	98.6	1	1.4	72	
	70.9	37.6 37.0	1.1	33.3 0.5	37.5	
高	81	98.8	1	1.2	82	
	80.7	42.9 42.2	1.3	33.3 0.5	42.7	
計		189	98.4	3	1.6	192

$\chi^2 = 0.359$ (自由度 = 2) 危険率 = 83.56%

表3.5.11 A. d. (使いわけ自己評価)と使いわけグループ

度数 期待値	横% 縦% 全体%	うまく使いわけられる		使いわけられるほう		使いわけられないほう		ほとんど使いわけられない		計	
使 い わ け グ ル ー プ	低	1	2.6	20	52.6	16	42.1	1	2.6	38	19.9
		1.8	11.1 0.5	25.5	15.6 10.5	10.3	30.8 8.4	0.4	50.0 0.5		
中	3	4.2	51	70.8	18	25.0	0	0.0	72	37.7	
	3.4	33.3 1.6	48.3	39.8 26.7	19.6	34.6 9.4	0.8	0.0 0.0			
高	5	6.2	57	70.4	18	22.2	1	1.2	81	42.4	
	3.8	55.6 2.6	54.3	44.5 29.8	22.1	34.6 9.4	0.8	50.0 0.5			
計		9	4.7	128	67.0	52	27.2	2	1.0	191	100.0

$\chi^2 = 7.885$ (自由度 = 6) 危険率 = 24.66%

表3.5.12 A. e. (敬語の将来)と使いわけグループ

人数 期待値	横% 縦% 全体%	1. もっときちんとしたほうがよい		2. 今のままがよい		3. もっと簡潔になったほうがよい		計
使 い わ け グ ル ー プ	低	10	26.3	18	47.4	10	26.3	38
		10.9	18.5 5.3	18.9	19.1 9.5	8.2	24.4 5.3	20.1
中	20	28.2	38	53.5	13	18.3	71	
	20.3	37.0 10.6	35.3	40.4 20.1	16.4	31.7 6.9	37.6	
高	24	30.0	38	47.5	18	22.5	80	
	22.9	44.4 12.7	39.8	40.4 20.1	17.4	43.9 9.5	42.3	
計		54	28.6	94	49.7	41	21.7	189

$\chi^2 = 1.230$ (自由度 = 4) 危険率 = 87.32%

表3.5.13 イメージグループと使いわけグループ

度数 縦%	イ メ ー ジ グ ル ー プ																	
	期待値全体%		(-) (-) (-)	(-) (-) (+)	(-) (+) (-)	(-) (+) (+)	(+) (-) (-)	(+) (-) (+)	(+) (+) (-)	(+) (+) (+)	計							
使 い わ け グ ル ー プ	低	5	13.5	2	5.4	5	13.5	8	21.6	4	10.8	7	18.9	4	10.8	2	5.4	37
		26.3		11.1		25.0		36.4		16.0		31.8		11.8		7.4		19.8
		3.8	2.7	3.6	1.1	4.0	2.7	4.4	4.3	4.9	2.1	4.4	3.7	6.7	2.1	5.3	1.1	
8	11.6	9	13.0	5	7.2	8	11.6	13	18.8	8	11.6	12	17.4	6	8.7	69		
中	42.1		50.0		25.0		36.4		52.0		36.4		35.3		22.2		36.9	
	7.0	4.3	6.6	4.8	7.4	2.7	8.1	4.3	9.2	7.0	8.1	4.3	12.5	6.4	10.0	3.2		
	6	7.4	7	8.6	10	12.3	6	7.4	8	9.9	7	8.6	18	22.2	19	23.5		81
高	31.6		38.9		50.0		27.3		32.0		31.8		52.9		70.4		43.3	
	8.2	3.2	7.8	3.7	8.7	5.3	9.5	3.2	10.8	4.3	9.5	3.7	14.7	9.6	11.7	10.2		
	計	19	10.2	18	9.6	20	10.7	22	11.8	25	13.4	22	11.8	34	18.2	27		14.4
																		100.0

$\chi^2 = 23.204$ (自由度 = 14) 危険率 = 5.70%

表3.5.14 知識グループと使いわけグループ

人数 期待値	縦% 縦% 全体%	知 識 グ ル ー プ							
		低		中		高		計	
使 い わ け グ ル ー プ	低	16	42.1	11	28.9	11	28.9	38	
		30.2		16.2		15.1			
		10.4	8.2	13.3	5.7	14.3	5.7	19.6	
中	27.8		40.3		31.9		72		
	19.7	10.3	25.2	14.9	27.1	11.9	37.1		
	17	20.2	28	33.3	39	46.4	84		
高	32.1		41.2		53.4				
	22.9	8.8	29.4	14.4	31.6	20.1	43.3		
	計	53		68		73		194	
		27.3		35.1		37.6		100.0	

$\chi^2 = 8.732$ (自由度 = 4) 危険率 = 6.82%

次に使いわけグループであるが、これは男子に限ってイメージグループとの関連が見られたのみである。その結果を表3.5.15に示す。これを見ると、あまり敬語を使いわけないグループの者は「(-)(-)」「(-)(+)」

と敬語に対してマイナスが勝ったイメージを持ち、よく使いわける者は逆にプラスの勝ったイメージを持つという傾向があるようである。

表3.5.15 イメージグループと使いわけグループ (男子)

度数 期待値 全体%	横% 縦%	イ メ ー ジ グ ル ー プ																
		(-) (-) (-)	(-) (-) (+)	(-) (+) (-)	(-) (+) (+)	(+) (-) (-)	(+) (-) (+)	(+) (+) (-)	(+) (+) (+)	計								
使 い わ け グ ル ー プ	低	22	27.5	8	10.0	16	20.0	9	11.2	11	13.7	5	6.3	7	8.7	2	2.5	80
		15.4	13.3	7.7	4.8	13.0	9.6	10.1	5.4	10.6	6.6	8.7	3.0	8.2	4.2	6.3	1.2	48.2
中	5	11.9	3	7.1	7	16.7	6	14.3	4	9.5	5	11.9	8	19.0	4	9.5	42	
	8.1	3.0	4.0	1.8	6.8	4.2	5.3	3.6	5.6	2.4	4.6	3.0	4.3	4.8	3.3	2.4	25.3	
高	5	11.4	5	11.4	4	9.1	6	13.6	7	15.9	8	18.2	2	4.5	7	15.9	44	
	8.5	3.0	4.2	3.0	7.2	2.4	5.6	3.6	5.8	4.2	4.8	4.8	4.5	1.2	3.4	4.2	26.5	
計	32		16		27		21		22		18		17		13		166	
		19.3		9.6		16.3		12.7		13.3		10.8		10.2		7.8	100.0	

$\chi^2 = 24.114$ (自由度 = 14) 危険率 = 4.44%

3.6. 結果のまとめ

これまでに述べてきた結果から、始めに仮定したもので、敬語に対する意識のうちのあるものがことば使い全体の丁寧さに影響するらしいことがわかった。それは、人と話をする時の自分や相手のことば使いへの関心の強弱である。その他の敬語意識及び敬語規範の知識の多少は、実際のことば使いの様子にはさして影響しないようである。

また、各々の要因については、性別が大きく関与していることが明らかになったと思う。

4. おわりに

これは昭和57年度東京都立大学に提出した卒業論文の一部を改稿したものである。

その後残された課題として、調査対象の拡大、特に若年の社会人との比較検討がある。データ処理方法の不備を正し、より適確に多面的に現象を把えるための努力も大いに必要であろう。また、今回あらためて明確になったような、ことばに関する諸々の性差が形成される過程についても機会があれば考えてみたいと思っている。

調査の実施にあたっては、神奈川県立鎌倉高校国語科の先生方、特に2年生担当の島津先生、福島先生、小野先生に大変お世話になった。先生方とインフォーマントになってくれた生徒諸君に心から感謝の意を表します。

また、多くの点で御助言、御協力下さった先生方、

先輩方、心理学専攻の野村晃氏をはじめ友人諸氏にも厚く御礼申し上げます。

〈注1〉以下、本稿では有意水準を5%とする。
 〈注2〉「横%」は横方向の人数の和を100とした場合のパーセンテージ。「縦%」は縦方向の人数の和、「全体%」は全体の人数をそれぞれ100とした場合のパーセンテージである。

〈注3〉この考えを裏付けるものとして、国立国語研究所1982の、同じ項目を面接調査した結果がある。

〈注4〉語形を分類する方法として、丁寧値の近い語形を順にまとめていくというのが柴田1980に述べられている。分析者の主観を極力排除するという点で優れた方法であると思う。しかし、今回の調査では、語形の総数が充分でないことなどもあって適用できなかった。ここの分類は、主として語形の形式や出現パターンの類似に基づく直観によっている。

〈注5〉ここで話題中の人物を「校長先生」としたのは、必ずしも適当ではなかった。「校長先生」を単に目上と見るか、「知らない人」に話す場合はソトの人に対する学校のウチの人と見なされるのではないか、あるいは、「目上」と比べてどちらが上位であるか、などがはっきりしなかった。

〈参考文献〉

- ・井上史雄1979「若者の敬語行動」『月刊言語』
Vol. 8 No. 6
- ・大石初太郎1967「現代における敬語の実態」『国
文学解釈と鑑賞』第32巻第11号
- ・大倉佐一1967「高校生の敬語の調査(1)~(3)」『実
践国語』332~334
- ・荻野綱男1982「第三者に対する敬語の数量化」日
本言語学会第84回大会発表資料
- ・国立国語研究所1957「敬語と敬語意識」秀英出版
- ・国立国語研究所1981「国立国語研究所報告70-1,
2 大都市の言語生活 分析編, 資料編」三省堂
- ・国立国語研究所1982「国立国語研究所報告73 企
業の中の敬語」三省堂
- ・斎賀秀男1967「まちがいがやすい敬語」『国文学解
釈と鑑賞』第32巻第11号
- ・佐藤信1968「推計学のすすめ」講談社
- ・柴田武1959「母というようになるまで」『言語生
活』98号
- ・柴田武監修・荻野綱男・藤田克彦・尾崎秩子・御
園生保子編著1980「都市の敬語の社会言語学的研
究 第一部, 第二部」東京大学言語学研究室
- ・田中章夫1969「敬語論議はなぜ起る」『言語生活』
213号
- ・野元菊雄1977「企業内における敬語行動」『日本
語と文化・社会 2 ことばと社会』野元菊雄・野
林正路監修 三省堂
- ・宮本和美1982「敬語使用における意識と実際の表
現との係わりについて」『相模国文』9
- ・柳井晴夫・岩坪秀一1976「複雑さに挑む科学」講
談社

なお、各種の統計処理には富士通のプログラムパ
ッケージ「SDA II」、因子分析には同じく「MULVA/X」
を用いて、東京都立大学電子計算機センターの FACOM -
M180 II を利用した。